

る。しかも之等の事件が Southern Hospitality (南方人の温情) の権化とも言うべき素朴にして限りなく純情な村落の人々の間に起つて強い対照的效果をあげているのである。

最後にハックは旧主人から許されて自由の身となつて夢かと喜ぶジムと共に筏のまま河口迄行つてみたいと言う。読者も河口まで物語をつずけてもらいたい名残惜しさを感じる。ミシシッピ河の魅力は忘れ難く残つているのである。

マークトウェインはドキュメンタリーなモチーフを放浪記を書く時に持つていたことがその序文によつて知られることを前にかいたが、ハツクルベリ物語にもそれが感じられる。みすぼらしい塗料も施さないあばら屋が傾き、塀はこわれ、錆くれた空罐がちらばり泥と雑草とほこりで一杯の道路が彼の育つた村ハンニバルの姿であつた。放浪記にある様に gambling, drinking and murder (賭博、飲酒、殺人) が gold rush (金鉱熱) 時代の首都ネバダに住む人々の毎日の行事であり、之は又ハンニバルの村でも同じで、作者は少年時代に4度も殺人を見たと言う。酔払いが短刀をぬいて人を追かけ廻し、黒人が叩き倒されて死に、人が街上で射殺されたり刺殺されたりする事件が毎週の様子に起つた。大部分の人は素朴善良な人々であつたけれども、重労働に疲れ果てた憂鬱な男、栄養不良で青ざめてイライラした女、文化の中心から遠くかけ離れた寒村の單調さの中では酒でもものむとか一寸したきつかけがあれば直ぐに以上の様な惨事が起り勝ちであつた。——そう言う環境の中に育つた彼が見たままの「残酷さと虚栄と横柄と卑劣と偽善」と同時に彼の詩魂に映じた河の美と原野の魅力を描いたのが Huckleberry や Life on the Mississippi や Roughing it である。

(1950. 10. 18)

分の頭が狂つてしまうかと思ふ程である。輝かしくキラメク作者の情熱の渦にまき込まれて眩惑しながら驀進する心持がするのである。

例へばスコットランド出身の立派な家柄の Grangerford 家と Shephardson 家との血なまぐさい確執は日本の仇討以上の残酷さである——14才になる Gran. 家の子供が森を馬で散歩している所を出しぬけに Shep. 家の主人が銃を持つて追跡する。5 哩も逃げたが遂に力つきて少年が立止つた所を銃を向けて射殺してしまい自分も 1 週間たたぬ内に殺されてしまう——4、5 人の騎馬の大男が口ぎたなく罵りながら川のそばにある木の積重ねの蔭の 2 人の少年を襲撃している。1 人の男が射落されて運ばれている間に少年達は逃げる。然し逃げて油断して立つている所を突然木かげから射撃され 2 人共傷ついて川にとび込んだがとうとう殺されて夕闇の岸辺に横わつていた。——次には南の方の小さな町に、田舎から Boggs という男が出て来る。彼は呑だくれで町の人々はそれを面白がつてワイワイ言いながらついて来。Boggs はシャーベンのお店に来て主人を盛んに酔つた勢で罵つて一度は去るが又戻つて来ても一度罵るとシャーベンは静かに出て来てピストルを構え、酔もさめて両手を上げてあやまつている Boggs を 1 発又 1 発。とうとう殺してしまつて顔色もかえずに店にもどつて行く——更に南の村、夜 8 時半、炬火をふりまわし、罵り叫び、ブリキ鑼を叩き、角笛を吹きならして群衆がやつて来る。これは King と Duke (王様と公爵) と呼ぶ 2 人の手におえぬ詐偽漢を捕えて身体中をタールと羽毛でぬりつぶして (黒人処刑等にやる方法で feather and tanned という) 練り歩いている所である。ハックは之を見て「見ただけでもゾツとする。人間と言うものは残酷なものだ」と自分が散々だまされた恨みも忘れて述懐している。

実に読者をして奇異の感を抱かしめ、胸の悪くなる残酷感を抱かしめるものである。之等の事件をつなぐに黒人ジムの人の心を打つ純なる献身的愛情の暖味があり、南へ南へと底知れぬ寂寞と憂愁をたたえつつ流れてやまぬ灰色の大河があり、更に彼の Duke と King という 2 人の浮浪の詐偽漢の頭と口から迸り出るユーモアと悪智慧とは暴風の様荒れる作者の想像力の焰を感じさせる。思想とか思考力以前の完全に奔放な人間の情熱の讃歌であ

中には6呎2吋と言う大きなものもある——乱暴な父から逃れて丸木舟にのつて流れつつ眠つてしまふ。目が覚めてみると舟は河の真中にある。岸边まで幾哩もある様な感じの夜の大河。月は皓々と照つて無数の流木が数えられる程で、すべては死の様に静かだ。夜更けの匂いがする。恐ろしい様だ——流速は毎時40哩以上だ。毎夜（逃亡奴隷ジムが乗っているのだから）岸の茂みにかくれて）7、8時間筏にのつて流れる。時には釣を垂れ、時には水泳をして眠気を醒ます。Other places do seem so cramped up and smotherly, but raft don't, You feel mighty free and easy and comfortable on a raft.

（他の場所は狭苦しくて息がつまりそうだ。然し筏はそうぢやない。とても自由で気楽で心地よい感じだ）——毎夜素晴らしく晴れた空がつづく。底知れぬ静かさに包まれつつ仰臥しながら無数の星を見上げて「あの星は神がつくつたのだ」「いや偶然の存在だ」と論じ合う。幾つとなく星が流れて落ちて行くのを見守る。——交代で夜の見張をするのに時刻が来ても奴隷ジムはハックを起さない。両膝の間に頭を突込んで独りで呻き悲んでいることがある。そしてハックが寝入っているものと思つて独り言に故郷遠く残した妻子に呼びかけて“Po' little Lizabeth! Po' little Johnny! It's mighty hard. I spec' I ain't ever gwyne to you no mo', no mo'!”（可愛そうなりザベスよ！可愛そうなジョニーよ！とても苦しい。もうもう何時になつてもお前達に会えるだろうとは思えない。）とつぶやく。ハックは此の様子を見てジムが好きで好きでたまらなくなる。

以上の辺で Huck 物語は丁度半ば頃である。月光の下に静かに流れる大河、深い霧にとざされて呼ぶ声はきこえても隣りの筏も見えぬ大河、果てしもない草原を背景に寂寥そのものの如く5軒、10軒からなるヒツソリとした河沿いの村落——この河沿いの風物の美を語るハックの表現は土語ではあるが、確かにマークトウェインの詩魂の感じたインスピレーションを伝えていると思う。

ハック物語の後半になると調子は一変する。詩人としての作者は影をひそめて、彼の凄い野性があらゆる束縛を粉碎してあばれまわる感がある。あまりにも野放図な空想と意想外な事件と想像を絶する人物達の性格の連続に自

であるから。

ナイヤガラ瀑布の様な精神力と天賦の才の濫費——伝統の訓練と教養を与えられなかつたが故に、成功の道があまりにも平々坦々となつたが故に、未完成の天才として残つてしまつたのである。

## V

最後にマークトウェインの代表作と言われるハツクルベリフィンの魅力はミシシッピ河への興味が中心となつている。読者の心にはそれが最も強い魅力として残つている。ホイットマンが典型的な開拓地のアメリカ人を愛した如く、彼はアメリカ国土の驚くべきエネルギーと美の中に歓喜に溢れ夢中になつて少年時代をすごし、その喜びの中に捉えたアメリカの国土を心の底から謳歌している。 “Oct. 12th, the discovery. It was wonderful to discover America (10月12日の発見。アメリカを発見するとは素晴らしいことであつた) ”と言つて居る。温かい泉の様に喜びと生命力とが滲み出す所の諸作品は先にも言つた様に彼がミシシッピ河を描く時である。

先づ信心深い或る富める寡婦がハツクルベリを養ひ子として家につれて来て、立派な人間にしようと苦心するが Huck はとうとうその家を逃げ出す。

“The widder’s good to me, and friendly, but I can’t stand them ways. She makes me git up just at the same time every morning; she makes me wash, (お婆さんは僕には親切で大切にしてくれる。然し僕はあのやり方が辛抱出来ない。お婆さんは毎朝僕をキッチンと同じ時に起きさせる。僕に顔を洗はせる) …”と言つてキッチンとした生活の束縛にたえられずに家を逃げ出す子供の奔放な自由への熱情を実に面白く書いている——酔いどれの父親が(この父親の呑み方の無茶苦茶な放肆さも野生的で痛快である) Huck をイリノイの森林の小屋に閉じ込める。その森林中の原始的生活の魅力、半未開人の熱い心が火を發する様である——大河の June rise (6月の増水) には悠々と漲る灰色の流れに持主なき丸太や筏や丸木舟が流下するのを見つけると、洋服のままでザンプと飛び込んでそれを拾いに行く Huck の喜び——皮をはいだ兎を餌に釣糸を流して Catfish (鯰) を5匹も釣り上げる、その

二、三段を造り足して行くかは分らないのである。この様にして一冊の本を書き上げるのに7年はかかるのである。… Tom Sawyer (トムソーヤーの冒険) と Prince and the pauper (王子と乞食) は各2、3年を要した。Life on the Mississippi は8年かかったのである。」

上述の様な彼の創作過程の気まぐれさが、その自叙伝や手紙によつて伺われるが、然し或作品を何年もかかつて少しづつ書き上げて行つた作家は多い。その気まぐれさの原因が別に考えらるべきではないかと思う。彼は I never could stand Meredith and other celebrities. (私はメレディスや其他の有名作品はとても嫌でたまらない) と言ひ、又フローベルは全然好かなかつたり、所謂小説と呼ばれるものを特に嫌つていた。従つて彼はすぐれた小説がどんなものであるか、読もうともせず、知ろうともしなかつたのであると思う。

Frontier (開拓地) の大原野の中に育つた生粋のアメリカ人の獨創性——それは彼の作品の到る所に漲つていて、その雄大さ、そのエネルギー、その特異性によつて我々を魅了して止まない。Paine の書いた伝記の中に「無数の蠅の如くに群つて来る考えを解放する為に書きなぐりながら原稿の山を造つて行つた」とある。

欧州の影響から全然離れて、むしろ輕蔑してアメリカ獨特のものを育てた一面には伝統をもたぬものの弱さと素朴さが覆い難く彼の全作品に現われている。ホーソン、エマーソン等の受けた様な伝統の教養と訓練を彼が受けていたならばと言う歎きを読むものに感ぜしめるのである。創作態度に於て克己と忍耐を始めから持たないで、唯自分の持つ才能とエネルギーに任せてきつすけたのであり、そう言う彼をアメリカの大衆がそのまま歡迎して大成功の頂点に押し上げたと言うことは米国史上に金光時代 (キンピカ時代=高い政治的又は精神的の裏づけもなく唯經濟力のみが眩しいほど發展した時代) と呼ばれる過渡期の為とは言えアメリカ文學の為には実に惜しいことであつた。彼が成功の頂点にあつて何時しか心鈍つて古い材料を繰り返し繰り返して用いて、新しい境地開拓への努力をしなかつたことも惜しまれてならない——当時の米国の文學者で、彼程の広い人生經驗を持つた人はなかつたの

2乃至4哩にわたつて綺麗に伐り払われている。初霜がふりそうになると農夫達はあわだしく作物を刈りとつてしまう。きびを絞り終つた時、彼等は絞りがすとなつた茎を山と積んで火をつける、他の砂糖栽培地方では絞つた茎は砂糖製造工場の炉の燃料とされるのであるが。10乃至15呎の堤が川口の端までズツとミシシッピーの両岸を護つている。この堤は大体10~100呎位水際から引込んで築かれている。燃え上る砂糖きび殻の山が100哩もつずいてそこから立上る煙の1間先も見えぬ暗さで全地域を埋めつくして水は岸辺を溢れている。眞夜中に船をそこに向けて見よ。どんな心地がするものだろうか。岸辺もなく向うは見えなくなつて暗黒の彼方に消えてしまう模糊とした暗い海原の眞中に居るのである。堤防のかすかな線だけは見分けられ、1本の立木が見えるという錯覚にいつも陥るのである。砂糖農場そのものも煙のために姿を変えて海原の一部の様に見えるのである。

#### IV

又彼は名講演家として海外にまで知られた人であるが、さすがに講演に注ぎ込んだ苦心と精力は大したものであつた。講演には彼は芸術家らしいあらゆる注意を払つている。「うんと休憩をとつておかなければ壇上で嫌なダレ気分が立つて常に楽しく深い喜びであるべき講演を難行苦行と化してしまふ」とか「講演をするには丁度適当な所で適当な Pause をつくること、正確な強勢をおきつつ一言々々を発すること、そして終りには用心ぶかく充分計画的に最後の驚くべき効果をねろう——ここに人として努力甲斐のある仕事がある」とも彼は言つている。たしかに芸術家としての苦心である。

ひるがえつて彼の著作の態度は唯その日その日の心持の動くがままに書き続けて一つの本を作ると言う風である。唯変化をつくつて読者を倦かせない様に努めつつ、自分の伝えんとする中西部、西部の生活を表現しようとしているのである。散漫でねばりがなく構成が足りない。これだけの感覚と筆力を以て惜しい事であると言う歎きを抱かせられるのである。彼自ら記している様に「私は常に四、五冊の本を同時に並べて創作をつずける習慣がある。そして毎年それ等に二、三段の煉瓦を造り足して行く。然しどの作にこの

々様々の風景と事件とユーモアとの変化に溢れる配列であつて読む者をして倦かせない面白さがある。

彼の作品は大部分が之に似た構成のものである。変化が多く目先も雰囲気もまぐるしい程に転換して行く。変化はあるが統一されず構成のないのが物足らぬ感じを与える。何時終つてもよいものであることは彼の大きな欠点である。

*Life on the Mississippi* も実にすぐれた筆の力を示している。あの怪物の様な大河を上り下りする船の動揺や河岸にそそり立つ枯れた巨木を照らす夕陽の雄大さや増水期の渦巻く流れを必死になつて船を操縦して行くパイロットの姿や暗夜に筏をうかべて川を下る人々の無法な生活や草深い岸辺に眠れるが如き町々の姿や——マークトウェインが生涯忘れることの出来ぬ男らしい剛健さ、逞ましい活動、健康で伸び伸びとしたパイロット時代（22才から2年半の間）の大切な思い出で充ちている。船の甲板から又は筏の上に仰臥して眺める夜空の神秘、両岸の風景は若い日の彼の情緒と審美眼をどれほど深く養つた事であろう。

アメリカ独特のテーマ、アメリカ独特の風物と雰囲気と人物——彼以前の作品にはなかつた世界である。確かに之はアメリカ文学の独立宣言である。ホイットマンが夢想しただけで具体的に表現し得なかつたものを彼が表現したのである。

原文の引用は長くなるから避けようと努めたが、然しミシシッピ河口の風景だけは割愛する気になれずして茲に掲げる。之は何の技巧もなく何気なく書き留めた様な文体であるが、ミシシッピの大きさを目前に見る様な幻想に人を導く。この様な描写がハツクルベリーにも自叙伝にもミシシッピ河上の生活にも次々に現われて読む者の心を恐らくは今は姿を変えてしまつたであろう所の雄大な大草原の中へつれて行くのである。

「ボストンルージュからニューオルレアンス迄川は巾1哩以上で非常に深く——所によつては200呎もある。両岸は100哩以上もの間森を完全に切り払われて果てしない砂糖きび畑に連なつていて、所々に支那から移植された美しいせんだん（china-trees）の若木や並木があるだけである。森は畑の背後

つ座っている時、我々の視界に South Pass City (南峠の市とは僅か四軒からなる部落) が入つて来た。ここはロッキー山脈の真中であり 1 万呎、1 万 3 千呎と言う山々が永遠の雪をいただいて立並ぶ。

In passing, monstrous rags of cloud hung low and swept along right over the spectator's head. At one place, one could look below him upon a world of diminishing crags and cañons leading down, down and away to a vague plain with a thread in it which was a road, and bunches of feathers in it which were trees — a pretty picture sleeping in the sunlight — but with a darkness stealing over it and glooming its features deeper and deeper under the frown of a coming storm; and then while no film or shadow marred the noon brightness of his high perch, he could watch the tempest break forth down there and see the lightnings leap from crag to crag and the sheeted rain drive along the cañon-sides and hear the thunders peal and roar.

(走り過ぎつつ、怪物の様にむくむくとした雲が低く垂れて旅人の頭をすれすれに行く。或所では目の下に岩石と峡谷の世界が段々小さくなりつつ下へ下へとつづいて、いつしか模糊とした平野となり、そこを糸の様に道を通じ、鳥の羽毛を集めた様に木々が茂りつつ——すべてが陽光の中に眠っている様な美しい風景——然しその上を暗い影が音もなく動き、近づく嵐の恐ろしさに平野の表情は刻々に深く曇つて行き——やがては旅人の立つ高所の真昼の輝きは少しの曇りも影もささないのに下界には嵐が巻き起り、稲妻は岩から岩へと跳び、白布を垂れた様な雨が峡谷の山腹をかけり行くのが見え、雷鳴が轟き、ハタめき、反響するのを聞くことが出来る。)

この分水嶺地帯の雄大な風景の中にたおれた馬の肉をあさつて喰う小人の様なインディヤンの生活があり、稀代の兇漢 Slade の血醒さいエピソードが挿まれ、移住者達の残した幾十匹と言うたおれた牛馬、その腐肉をつつく Coyote の群、Raven (大鴉) の群、そして雨もよいの暗い夜、散乱したこの骸骨からゾツとする様な仄かな青白い光が燃えた——と言う様な事件が荒涼たる又は雄大なる風景の描写の間に挿入されている。一冊の書物全体が種



原を横切つて駄馬車の旅をした思い出の記録である。ミズリー州セントジョゼフの村から加州サクラメント迄1900哩、当時即ち100年昔は駄馬車で15日間の旅程であつた。

大草原から砂漠え、それから雪をいただくロツキー山脈を横切る間の風景は実に魅力がある。次の一例などでは夜明け方の草原を走り初める馬車のたのしさと動搖が文のリズムそのものによく感じられるのである。

It was just dawn ... The stage whirled along at a spanking gait, the breeze flapping curtains and suspended coats in a most exhilarating way; the seat of 'a cradle' swayed and swung luxuriously, the pattering of the horses' hoofs, the cracking of the driver's whip, and his "Hi-yi! g'long!" were music; the spinning ground and the waltzing trees appeared to give us a mute hurrah as we went by ... (丁度夜は明けようとする。…馬車はタンパタンと音たてて走り、朝風は活々と喜びをかき立てるかの如くカーテンを吹き、窓につるした上衣をハタめかせる。座席は搖籃の如く心地よく楽しく揺れる。カツカツと馬蹄のひびき、ピシリと馭者のふるう鞭、そして「ハイ、ヤイ、ソラ行け」と叫ぶ声は音楽であつた。目まぐるしく走り去る地面、ワルツする木々は走りすぎる我々に声なき応援を送るかの如くであつた。)

西部の砂漠地帯には Sage-brush (やまよもぎ) と言う木が2尺位の高さで地面に這う様に茂り、その茂みの下に仰臥して頭を入れると実に涼しい日蔭をつくる。小さいながらに榊の木のような節くれ立つた幹、ひねくれた枝、灰緑色の葉が67尺の間隔で砂漠をおおい、山を覆つて加州の州境まで茂っている。この Sage-brush 以外には殆んど植物と言うものはない。その砂漠には Coyote (カイオウト、西部の山犬) がうろついている。ひよろ長いやせて肋骨の見える山犬である——ぬすみ見する様な狡猾な目つき、尖つた顔、むき出した歯。

それからロツキー山脈が見え初める。——カーテンを開いて早朝から煙草をくゆらしつつ並び立つロツキーの山々を照し出し、峩々たる岩石、尖つた山頂が次次に赤味を帯び、黄金に輝き出す時の朝日の素晴らしさを打眺めつ

一モアに疲れた心を解き放つて豊かな詩人的な素質をよみ返らせて不朽の作を残させたのであろう。

G. B. ショウはマークトウェインと氣質的に通ずる所のある人であるが、彼はマークトウェインに対して「将来アメリカの歴史家達はフランスの歴史家がヴォルテールの政治論集に対すると同じ様に貴下の著作が不可欠のものであることを知るであろうと確信する」と言っている。国力進展時代を代表する国民的作家としての人気の頂点から50年を経た今日尚人氣が落ちないで人々からくり返して読まれつづけるものは前に述べた如く中西部及西部の風土と生活を描いた諸作品であらうと思う。

### III

昔 Jane Eyre を読んで、私は最もこの小説に魅せられた。若い頃読んだ英文学の作品の中で一番好きなものの一つであつた。所が近頃よみ返してみると文章が粗末であることに気づいた。それは情熱的であるが奔放にすぎる。直ぐ其後で Sketch Book を開いてみたが、さすがによく磨かれて整つた文体であることを感じた。Rip Van Winkle 一つ読んでも Irving の良さがしみじみと感ぜられる。

その様な文体の美と言う点から見ると、マークトウェインの文はアーヴィングの様に整つてもいないが、ジェインエアよりはズツと整つたものである。そして独特の力がともつている。速筆で有名な彼ではあるが、一つ一つ土台石をおいて行く様な手固さから来る力が感じられるのである。適確に対象を描いてドツシリとした落付きをもつている。確かに巨匠のペンである。或所ではトルストイがセバストーポリの戦を描いたあの筆の力を思い出させるものがある。唯彼には物の特徴を、特に人物の特徴をゆがめたり誇張したりしてユーモラスな効果をねろう傾向が目立つ。

すぐれたリズムを持つ文、詩的な文、写實的なきびしい文、ユーモラスな文——種種なる文体のしかもすぐれたものに接しられると言う意味で私は Roughing it に興味を持つ。これは1872年彼が37才の時に11年の昔、ミシシッピ河のパイロットをしたり南北戦に従軍したりした後、兄と共に中央大草

うではあるが又一面にはその自叙伝などを読んでみても感ぜられる様に彼はユーモラスな自分の才を伸ばす為に苦心した跡も見える。日常の生活に表われる一寸した思いつきや、人人の語る言葉などにユーモラスなものがあるとチャンとそれを記憶にとどめておいたらしい。自らを辱かしめると思いつつもその方向に進んで行つたのである。ユーモラスならんが為に持つて廻つて嫌味な所も相当ある様である。彼の手紙や言行に表われた所から推して彼の社会に対する諷刺やユーモラスな文体は幾分は文を売らんが為とか人気の為とか言う対外的な要請の下にかかれたものでもあろう。それは要するに彼の本領ではなかつた事を感じさせる。確かに数十年を経た今日の我々の心に訴えるものはこれ等ではなくて、彼がミシシッピ川や中西部の原始林や草原や砂漠や山岳を描く作品、そこに生きる開拓地の人々の性格こそ我々の心に滲み透つて来るものである。Huckleberry Finn (ハツクルベリの冒険) が彼の代表作であり、同時に米文学史に於ける地方色文学の傑作の一つである。そして永久に残る作品であらう。その他に私にとつて忘れられぬ印象を残すものは Autobiography (自叙伝), Roughing it (放浪記), Life on the Mississippi (ミシシッピ河上の生活) 等である。

## II

彼自身が放浪記の序文に「これは單なる私の体験談であつて正式の歴史でもなければ哲学的論攻でもない。数年間の變化に富む放浪生活の記録であつて読者が暇つぶしに余暇を楽しむのをたすけるのが目的である。けれども尙この書には記録的なものがある。どの書物にもまだ扱われない西部の歴史に於ける興味ある挿話が収められている」と書いている。「11、2年昔のあの素晴らしい時代には太平洋への横断鉄道はなかつた——たつた1哩もなかつた」と書いている。横断鉄道が出来たのは1869年であつた。「女々しい」小説は大きらいで伝記と歴史を最もよろこんでよんだ彼である。歴史家らしい心持も手伝ひつつ、此時代の記録を残しておきたいと言う愛着の心、少年時代の心を魅惑し育てあげてくれた所の素晴らしかつた中西部の原始林や草原や大河へのノスタルヂヤ——これ等が人気作家マークトウェインの諷刺とユ

の気分というものは殆んど知らずに育つたのである。馬車もなく汽車もなく欧州からの香を幾分でも運んで来るものとは時時大河を上つて来る蒸気船だけであつたのである。従つて生粋のフロンティヤ人らしい、彼の氣質、趣味、考え方のすべてが此の国土開発、産業発展、政治的、社会的進展時代の国民の気分投じて当時の国民の人気を中心となり国民的英雄となつてしまつたのである。彼は文学者として国民的人気を博した最初の米国作家である。それは中西部の平原をたえず移り歩きながら農牧をする平凡な米人——ホイットマンがほめたたえている民主的な米人——の感情や考え方や生活をよく理解してその深い心の底までも、彼が健筆に描いたからである。従つてその多くの著作で権威に対し、特権に対し、虚偽に対して民主主義者らしい攻撃と嘲罵を到る所であびせかけている。講演に於て文章に於て、喜びにつけ憤りにつけ国民と一つになつて自分の感情を躊躇なく吐き出している。彼が自動印字機や印刷所の事業に失敗したという噂が出ると国中から同情の小切手が流れ込んで来たという。負債を支払うために世界一周の講演旅行に出かけたと分つた時、全国民がその英雄的な心に感動したという。人気の頂点にあつた晩年の彼は極端と思われる迄に破壊嘲笑のペンをふるつて、あらゆるものに熱情的な攻撃を加えた。之も彼の人気の大きな原因であつた。

又彼はユーモアリストとして有名である。寧ろ日本ではユーモア作家として一口に評し去られてしまう場合も多い様である。確かに彼の作品はユーモアに充ちている。然し本当は彼はユーモアリストと評されることを嫌つていた。彼がネヴァダ州の銀鉱熱の町に住んでいた時代に種々なる文体を試みて之を投稿したのであつたが、唯ユーモア作品だけが何時も評判がよかつた。結局ユーモア作家としての才を買われて新聞記者となつたのである。当時のアメリカ社会の雰囲気の影響でもあろうが、彼はユーモア作家としてでなければ世に第一歩をふみ出せなかつたのである。或講演会の歸りに友人に向つて  
“Oh, Cable, I am demeaning myself —— I am allowing myself to be a mere bafoon. It's ghastly. I can't endure it any longer! (オー、ケーブル君、僕は自分を辱かしている——自分を唯の道化役者にしようとしている。思つてもゾツとする。とてもこれ以上は辛抱出来ない。)と言つている。そ

# Mark Twain の作品と Frontier

上 村 盛 雄

## I

Mark Twain (本名 Samuel Clemens) は 1835 年に生れ 1910 年に死亡。南北戦争の頃青年時代を過し、その後の米国経済力と国力の目まぐるしい程エネルギーな進展時代の間、文学活動をつづけた人である。

北米の太西洋岸から 100 哩入った所をアレガニー台地が南部から北部まで走っている。この山脈と太西洋岸との間の米国人の生活は欧州文化の影響を間断なく受けつづけたのであつた。文学もこの地方に生れたもの即ち Emerson, Poe, Thoreau, Melville, Hawthorne, Whitman 等すべてが永い歴史を持つ英文学をよみつつ育ち、英文学の眼鏡をかけて米国の環境や生活を眺めたのであつた。Mark Twain 以前の米文学の主流は之であつた。

所が Mark Twain が活躍している頃の米文学は欧州文学とは全く離れた別の方面に新たな分野を開拓し——新たな題材、新たな表現、新たな生活を取り入れる様になり之が 1900 年に入る頃迄の主流となつた観がある。即ち独立戦争が終り (1783) アレガニー台地を越えて自由に移住することを許され、次には仏国から買収したミシシッピ河以西への開拓 (1803 年以後) が初まると米国民の前には驚異の天地が現出した。森林も原野も川の流れも空も風も総べてが全く異なる様相を呈した。その上に西部には 1848 年の金鉱発見を手初めに銀、銅、石炭、石油等種々な重要鉱産が世界一といふ豊富さ、大規模の牧畜の発達——ミネソタの鉄——中西部の麦、唐モロコシ——之等の資源が米国民の注意を中西部及西部に集中し、旧世界とは比較にならない大富源に夢中になつた。この様な国土の中心部であり、想像を絶する大きな自然のエネルギーの集中する中心と考えられたミシシッピ河の中流、ミズリー州の一寒村に彼は生れて若い頃をすごした。彼は開拓地の空気だけを吸つて欧州